

羅津からの難民記

宮城県 車塚 ワキ

一 羅津空襲、負傷者の手当

私は、当時羅津で満鉄病院の看護婦をしていました。忘れることもできない昭和二十(一九四五)年の八月八日午前一時ごろ、空襲警報のサイレンが慌ただしく鳴り響きました。もう二カ月近くも、毎晩のように空襲警報は発令されたのですが、今までは海に機雷を投下するだけなので、二時間もすれば解除されました。毎晩のことですから、いつでも飛び出せるように靴まで履いて寝ていました。しかし、その日はいつもと違って陸地にも襲ってきました。避難しようと外に飛び出して、あつと驚きました。何と、真昼のように明るいです。これが照明弾だそうです。そして、爆撃されているのは羅津の町でした。「こんなに明るく照らされるなら、灯火管制など意味がないわね」と、

な足を引きずりながら帰る人もいました。

相変わらず空襲は続いています。病院はまだ空襲は受けておりませんが、時間の問題でしょう。

羅津の町の大きな建物や橋、駅などが爆破されたといううわさも入ってきました。午後になると、病院には軍隊のトラックが何台も入ってきました。負傷した兵隊さんを運んできたのです。手術や手当は外科だけでは間に合わず、手術室を持つ科は大忙しでした。手足がもげたり、腹部を負傷して出血している人などで、どの人から手当をすればよいのか判別している間にも、次々と担架で負傷者が運び込まれ、すぐに廊下もいっぱいになりました。警報が解除になったと思ったら、すぐにサイレンが鳴り響きました。私たちは、ただただ夢中で働きました。時計を見る余裕さえありません。

一人でも多くの兵隊さんの治療をしてあげたいからです。でもせっかくな病院まで運ばれてきたのに、治療を受けずに亡くなる方もいました。かわいそうにと思ふいとまありません。今痛みに苦しん

友だちと話しながら病院まで走って行きました。病院内は、廊下に懐中電灯が一つ置かれているだけで、薄暗いのです。急いで病室に行きましたら、患者さんは全員起きていました。一人の患者さんが、「この空襲は、ソ連軍でウラジオストクからだろう。近いからいくらでも来るよ」と言いました。羅津の町は真つ赤に燃えています。目標は軍隊の食糧倉庫や弾薬庫のようでした。「日本人も知らない軍隊の重要な場所を、どうしてソ連軍が爆撃できたのだろう。スパイがいて教えているんだ」と言う人もいました。そんな話を聞いても、日本人でありながらお金のために自分の国の秘密を売るような人がいるなど、とても信じられませんでした。

その朝早く、院長が職員一同に「入院患者は、全員退院して頂きます。自分で動けない人は家族に迎えに来てもらうか、あなた方が自宅まで送って下さい」とのことでした。午前中には、ほとんどの患者さんは家に帰りました。中には、不自由でいる人を、一人でも多く助けるのが病院の使命です。トラックがまた着いたようです。負傷者の手当に、皆走り回っています。衛生兵も病院に来てくれました。廊下に寝かされていた兵隊さんたちも、手当が済んで病室に移されました。病院も少し落ち着いてきましたようです。

気が付いてみると、朝から一杯の水も一粒のご飯も口にしていませんでした。友だちが、お握りをお握りして来てくれました。手当をしながらはおばりました。日が暮れたころ、またサイレンが鳴っています。いつもは地下室に退避するのですが、今日はそんな余裕もありません。直撃弾を受ければ全員死ぬのですが、私も皆も死への恐怖などありませんでした。夢中で手当をしていたのです。

気が付くと、外は明るくなっていました。九日になっていたのです。一睡もしていませんでしたので、頭が少しぼーっとしていました。また警報です。院内放送で「避難できる人は地下室に」と

のことでしたので、友だちと地下室に行き様子をうかがいましたが、異状がなさそうなので再び一階に上がりました。ちょうどそこに兵隊さんがトラックで運び込まれてきましたので、手当をしました。二度目に外に出ましたら、戦闘機の機銃射撃です。トラックを木陰に隠し、人々は院内に逃げ込みました。建物に当たった戦闘機の銃弾は、コンクリート壁を貫通するほどの威力はありませんでしたが、外にいる人を見つけると執拗に追いかけて、土煙は逃げまどう人にだんだん迫っていきましました。

ようやく大勢の負傷者手当もめどが付き、交代で休むことになりました。私は婦人科勤務でしたから、二階の婦人科の自分の部屋に行きました。一階の手術室ではまだ治療が続いているようですが、ここはだれもいません。窓がカーテン越しに赤く見えるので開けてみますと、港がすぐそのように見えました。七日には何十隻もの船が入港していたのですが、今は数えるほどしかいません

くれ」たくさん飲ませてあげたいのですが、お腹の手術をしていますので、たくさん水を飲ませるわけにはいきません。吸い呑みに、口を湿らせ一口飲むほどの水を入れてあげます。感情に負けて、欲しがらだけ飲ませて死なせてしまつては何にもなりません。でも、助かる見込みのない人には望むだけの水をあげたい。そんなことを考えていると、頭がおかしくなりそうです。「もう少し良くなるまで我慢して下さいね」そう言つて吸い飲みを受け取り、別の病室に行きました。ようやく全部の病室を回り終わったと思つたら、もう十日の朝になっていました。

二 羅津脱出、また空襲

事務長が、皆を会議室に集めて「こんなに空襲が激しくては、ここで診療を続けていくことはできません。満鉄社員は満州に移します。あなた方は寮に戻つて、二、三日分の着替えと当座必要なものだけを携行。あとの荷物は送りますから梱包して各自の部屋に置き、三十分後にここに戻りなさ

し、そのうえ爆撃を受けているのです。真つ赤に燃えている船の甲板を走り回っている、船員の姿も見えました。燃えているのは一隻ではありません。敵機はさらに爆撃を続けています。自力では消火できず、燃えている船は港の障害にならないよう、残つた力を振り絞つて港外へ出て行きました。そのとき敵機が一機、火を吹きながら海に落ちました。「ああ！ 良かった、一機でも少なくなれば」と思いました。でも、敵機は湧き出すように次から次へと爆撃にやってきました。

そのとき病室の方から、唸っているような、何か言っているような大きな声が聞こえてきました。急いで病室に行つてみました。衛生兵もだれもいないようです。手探りで病室に入りますと、寝ている兵隊さんが「おしっこしたい」「俺も」「俺も」と訴えています。病室の小さな懐中電灯を頼りに採尿器を持つて回りますが、すぐにいっぱいになってしまいます。応援を二人頼んで、三人で病室を回りました。「水をくれ」「腹いっぱい飲ませて

い」と指示されました。布団を袋に、行李に荷物を詰め縄を掛けて、荷札を着け部屋に置きました。戦争に負けるなど想像もできませんでしたが、まだ戻つてくるつもりでした。着替えなどは手製のリュックサックに入れ、救急袋にはできるだけの医薬品を入れました。

病室に戻つたら、負傷者がまた次々に到着しておりました。私たちは看護婦です。この苦しんでいる患者を残して、満州に避難などできません。午後三時を過ぎたころでしょうか、暁部隊からトラックに乗った衛生兵が到着しました。「これからは自分たちがやりますから、看護婦さんたちは避難して下さい」と言われました。婦長が代表で「私たちも今まで通り手伝わして下さい」とお願いしたのですが、「これは軍の命令です」この一言に返す言葉はありません。仕方なく皆避難することになりました。炊事場でお握り二個と米五合をもらい、十人くらいずつで病院を出ました。出発前に、

救急袋に入れた麻薬をもう一度確認しました。間違はなく五本ずつ持っていました。いざというときには静脈に注射すれば自決できるのです。

病院の裏から山に登りました。山といっても、日本とは違って木は一本も生えていません。いわば高い丘でしょうか。二百メートルぐらい登ってからあとを振り返り、皆で病院にいる兵隊さん方の安全を願い、手を合わせて祈り涙を流しました。港を見ると船が三、四隻、爆撃を受けて半分沈みかけていました。

それから二十分くらい歩いた二つ目の山の中腹に、バラック建ての兵舎がありました。兵隊さんはあまりいならしく、二、三人しか見えませんでした。山を登っても、私たちの他にはだれも見えません。午前中から社宅の人たちは避難していたようです。町の人たちも水源地の方に避難したということです。水源地には大きな木がたくさん生い茂っていて、隠れる所も多かったようです。

でした。兵舎の方を見ると煙も土ぼこりもだんだん納まって、なんと兵舎は跡形も無く消えておりました。二、三人いた兵隊さんたちはどうなったのでしょうか。暗くならないうちに、水源地まで行かなければなりませんので、先を急ぐことにしました。

一時間以上も歩いたと思うころに、ようやく人の姿を見ることができるようになりました。子供を連れた、社宅の奥さんたちの一団のようでした。二歳くらいの子供が、「もう歩けない。おんぶ」といって泣いているのです。お母さんも一緒に泣きながら、「そんなことを言ってもおんぶはできないのよ。歩かなければひとりぼっちになるんだよ」とお母さんは食べものや着替えなど、持てるだけ持っているのです。とても悲しい光景です。私たちにも手を貸す余裕はありません。

八月八日の空襲が始まる一週間くらい前に、防衛召集でほとんどのお父さん方は召集されたのです。お父さんがいれば、二歳の子もおんぶしても

兵舎を通り過ぎて十五分ぐらいも歩いたでしょうが、山の頂上に着いたときですが、飛行機の爆音が聞こえました。隠れようと回りを見ましたが、草が生えているだけで木など一本もありませんでした。皆ばらばらに散って草の上に伏せましたが、一人だけ仰向けに寝ている人がいて、大きな声で飛行機の様子を教えてくれるのです。「三機きた！」「下の兵舎を爆撃しているみたい」「ああ、こつちに来るよ！」ちょうど私たちが伏せている山の上で旋回して、下の兵舎を爆撃に行くのです。旋回するときはずいぶん風が吹いてきます。突風のように感じました。「今、兵舎を機銃掃射しているよ。二機こつちに来る！」私たちは今度こそ機銃掃射されると思い、今か今かと冷や汗をかきながらじつと伏せていましたが、見つけなかったのか、旋回して飛び去りました。立ち上がって兵舎の方を見ると、煙と土ぼこりで何も見えませんでした。十分か十五分くらいだったと思いますが、長く感じました。「ああ、死ぬかと思ったね」皆同じ思い

らえたのですが。本当に死ぬよりつらい思いをしながら、駅までまだまだ長い道のりを歩かなければなりません。今の人にはとても想像もつかないと思います。戦争はすべきではありません。苦しむのは、弱い子供や女の人たちが多いのですから。ようやく水源地の森に着きました。ここには大木が茂っています。辺りは薄暗くなってきました。私たちは病院関係の人を探し、ようやく会うことができました。今夜はこの森で休み、明日から歩いて満州を目指すことになりました。距離は百三四十キロメートルくらいと言われました。

夜寝ていると、雨が降ってきました。薄明るくなり始めましたので、出発することにしました。山道も歩きましたが、そのうちに広い道路に出ました。飛行機の爆音を聞き、機銃掃射を心配して山道に戻ったこともありましたが、飛行機の心配もなくなり、また広い道に出ましたが、いつの間にか人、人でいっぱいになっていました。あまり大きくはありませんが、流れの急な川がありました。

川に張ってくれたロープにつかまり、胸まで水に漬かりながら渡りました。夏だったのが幸いでした。子供は、男の人がおんぶして渡してくれました。

夕暮れ近く、小川のほとりで人々は休みながら夕食の準備をしていました。私たちもここでひと休みと決め、持っているお米を少しづつ出し合ってお握りを一人一つ食べました。そして、また歩き始めました。どのくらい歩くのか全然分かりませんが、ただただ歩くだけです。途は真つ暗で足元が分からなくなりましたので、これ以上無理して歩くのもかえって無駄だとのことで、男の人が朝鮮人と交渉し、お金を払って物置で寝ることにになりました。藁を敷いてくれましたので、一行十数人が詰め合って、出発後初めて足を伸ばしてゆっくり眠れました。

朝になって目を覚ますと、すぐ出発です。途中で別れ別れになっていた病院の人たちとも一緒にになりました。看護婦で流行性脳脊髄膜炎にかかり、食べ物を探しましたが、小麦粉が見つかっただけで、塩も醤油ありませんでした。だれかが「醤油があった」と言うので、ほっとして鍋の蓋を取ってごぼごぼ入れました。なんと、クレゾールの匂いがブーンと鼻をつきました。後悔先に立たずでした。一度匂いをかいでから入れれば良かったのに、薄暗い所での失敗でした。何一つ食べられませんが、何日かぶりで畳の上で眠ることができました。

朝になって、本部からお握り作りを手伝うようにと言われ、皆で出掛けました。大きな釜で炊いたご飯を握って皆に配り、私たちも頂きました。食べ終わったところに列車が出ると言われ、駅へ急ぎましたが、列車はなかなか出発しません。そこへ本部から連絡がきて、お握りが足りないから本部に戻って作ってくれ、と言うのです。私たちは「なぜ看護婦ばかり使うのか。婦人社員がたくさんいるではありませんか。私たちは、たくさんの負傷者の手当で疲れ切っています」と言って断り

後遺症で下半身が動かなくなった人がいたので。山越えのときには病院の食堂で働いていた朝鮮の人、二人が交代で背負ってきてくれたのだそうです。この人たちも疲れていましたので、今度は看護婦が交代で背負うことになりました。私も背負ってあげました。「すみません、ごめんなさい」と言われると、背負われている人の方がどれほどつらく悲しいかと思いました。

連日の徒歩進行が続き、靴も傷んできました。裸足で歩く人も出てきました。さすがに「疲れたな！」と思うようになりました。そんなとき、だれ言うともなく「あと十二キロメートルも歩けば駅に着く」と伝わってきて、皆喜びましたが、足が痛くなつてからの十二キロメートルは長いなと思えました。できるだけ駅の近くまで行って、泊まる所を探そうと話しました。

凶們に着いてようやく一軒の旅館を探しました。女性だけ十人ぐらいが旅館に入りました。旅館の人たちも皆避難したらしく、だれもいません。皆ました。

しばらくしてようやく列車は発車しましたが、客車は二両だけで、あとは無蓋貨車ばかりです。私たちは無蓋貨車に乗り込みました。列車は動いたと思えば停まり、次の駅まで何時間もかかりました。そこで停まったまま動きません。飛行機が飛んできて駅の上で旋回して飛び去りましたが、やがて、こちらに向かってくる飛行機三機が、きらきら光る十センチメートルぐらいのものを落とすしていました。「あれ爆弾でないかしら、この列車も爆撃されれば死ぬよね」「列車から降りようよ」友だちと話しながら飛び降りて、ホームに上がりました。そのときには、もう飛行機は機関車と貨車を爆撃していました。ものすごい爆風と土ぼこりで、周りは何も見えません。防空ずきんも爆風で飛ばされそうでした。十分ほどの時間が随分長いように思いました。

やっと辺りが見えるようになり、友だちを見つけて「すごかったね」と言いました。そして、駅を

離れて畑の方へ行くことにしました。トラックが二台、人を満載して走り去ろうとしたとき、飛行機が一機、低空で機銃掃射を始めました。皆驚いて、蜘蛛の子を散らすように逃げました。トラックの下に潜り込む人、建物の方に走る人、そんな光景を人ごとのように見ていましたが、友だちに手を引かれて畑の中の防空壕に逃げ込みました。飛行機は飛び去ったようですが、ときどき爆弾の破裂するような音が聞こえてきました。駅員が、メガフォンで「駅から離れて下さい」と叫びながら走って行きます。私たちが乗っていた列車に、日本軍の爆薬が積んであったらしいのです。爆撃が原因なのかは分かりませんが、その爆薬が次から次に破裂して負傷者が多く出ているようです。私たちも駅から離れましたが、どこへ行けば良いのか分からず町の方へ歩き始めたとき、「病院関係者は凶門病院に集合して下さい」と言われました。探しながら三十分も歩いてようやく凶門病院に着きますと、玄関から待合室まで患者さんで

ことを知りました。そして病院の方から、この先の駅から最終の列車が出るから早く行くように、とのことでした。でも駅までの道も分かりませんでした。でも、あとから歩いてきた三人と一緒にになり、五人で「線路を歩くのが一番」と線路に入って歩き始めましたが、敷いてある小石と枕木に足を取られて歩きにくいし、靴もボロボロで、かかとははみ出ています。満州は駅と駅の間隔が長く、歩いていても駅は見えません。

何時間歩いたか分かりませんが、建物のようなものが見え、必死になって歩きました。駅でした。列車も停まっています。列車に乗り込みますと、なんだか分かりませんが異様な匂いがします。中は暗くて見えませんが、手探りでようやく友だちと二人で腰を下ろすことができました。今までのことがいろいろ思い出されます。羅津の病院を一緒に出た友だちのうち、二人は凶門の病院に入院していますが、あとの人には空襲を受けたときから会っていません。どうしているのか心配です。

いっぱいです。どの人も爆風で服は破れ、体はどこも真っ黒でした。十一、十二歳くらいの女の子が、私たちの所に走り寄って「看護婦さん、私のお父さんとお母さんを見なかった？ 探しても見えないの」と泣きながら言うのです。見ると、顔の左の頬肉が半分取れて骨が見えているのです。かわいそうに、美しいお嬢さんでしたのに、人をかき分けて早く先生の手当を、と担当の看護婦さんにお願いました。そして、お嬢さんのご両親を探しに出掛けましたが見付かりませんでした。後日聞いたところでは、ご両親は既に亡くなっておられたそうです。

羅津で一緒だった看護婦が入院していると聞き、行ってみました。無蓋車に乗っていて爆撃を受けたようで、大層痛がっていました。凶門病院の看護婦さんに手伝わせて下さるようお願いしましたが、「患者の看護は、私たちがやりますから大丈夫です。撫順に行くそうではないですか。早く行って下さい」と言われ、初めて私たちは撫順に行くそんなことを考えながら、いつの間にかうとうと眠ってしまいました。

目を覚ましたら、列車は動いていました。ああ、動いているかと安心してまた眠ってしまいました。目が覚めると、辺りは明るくなっていました。乗っていたのは貨車です。随分余裕ができていました。聞けば、病人が途中で降りたそうです。小川のある所で列車が停まりました。一時間休憩というので、水を飲みに行きました。昨日の朝お握りを食べただけで空襲に遭い、食事どころではありませんでした。これも、野原で食べ物などありません。でも、水をたくさん飲めたので空腹感はありませんでした。

列車は走り出しました。夜になって、今度は横になって寝ました。次の朝、列車が停まった所は民家も所々にあり、ジャガイモ畑が広がっているところでした。男性四、五人が民家に行き、ジャガイモ畑一枚を買ったというのです。全員が列車を下りて芋掘りです。大きな鍋を借りて、列

車に乗っていた人全員に一個ずつでしたが、いき渡るまで随分時間がかかりました。が頑張りました。塩も何もありませんでしたが、美味しかったです。今でもあの味は忘れられません。

次に停まった駅で、「医療関係の方は下車して、次の列車に乗っている凶犯での負傷者の看護をお願いします」と言われました。ホームに五、六人が下りました。なんと羅津の友人がいるではありませんか。元気な顔を見て、良かった良かったと再会を喜び合いました。

夕方近くになって、寝台車が入ってきました。爆撃で負傷した人たちが三百人も乗っていました。あまり重傷の人はいませんでしたが、医者は一人もいませんでしたから、看護婦だけで手当をして回りました。負傷したとき手当してもらっただけで、何日も治療せずにいたように、血が染みただけ帯は真っ黒に固まっていて、やっとほどくと中から膿が流れてくる人や、手のひらを怪我した人が、チクチク痛いと言うので包帯をほいほいとみると、

ありました。

こんな生活が一月も続いたところに、ソ連兵が入って来ました。この兵隊たちは罪人だったそうで、頭は短く刈ってあり、気が荒く、少しでも抵抗すると何のためらいもなく射殺するのです。欲しいものは何でも取り上げてしまいます。女性は髪を切り国防色の服を着て、一歩も外には出ませんでした。ソ連兵が来るたびに非常ベルを鳴らし、皆部屋に入ってドアに心張り棒を掛けました。ある日、三人のソ連兵が私たちの診察室に入ってきました。逃げ場がありませんでしたのでとっさに二階の窓から庭に飛び降りましたが、この兵隊は憲兵だそうで「こんな所から飛び降りては危ない」と通訳に話したそうです。憲兵は同じソ連兵でも、悪いことをしているのを見れば射殺するそうです。この憲兵が来てから治安も日に日に落ち着いてきましたし、患者も日増しに容態が良くなっていました。

撫順は毎日のように避難者が入って来て、人口

ウジが盛り上がってうごめいていました。患者さんには見せずに処置しましたが、こんな人が何人もいました。

こうして治療に明け暮れて四、五日が過ぎたころ、撫順が近くなってきました。このころになって、日本は戦争に負けたのだということをお聞きしました。信じられないことでしたが、八月十五日に天皇陛下の玉音放送があったそうですが、そのころ私たちは爆撃されて六百人も死傷者が出ていたのです。

三 撫順でのソ連兵

ようやく撫順に着きました。八月二十三日だったと思いますが、確かなことは覚えていません。戦争に負けて、これからどうなっていくのか。羅津局の人から「二、三人ずつグループになって、お寺、小学校に収容されている負傷者を看護して下さい」という指示を受けました。この間、風呂に入ることもできませんで、虱が体中ついていて頭がかゆく、クレゾール液で洗って凌いだことが

は何倍にもふくれて、食料品の値段も高くなっていきました。このころから、皆働くようになりました。ソ連共産党の「働かざるもの食うべからず」の主義の通りでした。男性は、炭鉱で一日三交代で零下二十度の所で夜中も働いていました。銃を持ったソ連兵の監視付きで、一日百八十万トンは必ず掘れと命令されていました。一番かわいそうだったのは、満蒙開拓団の人たちでした。十五、六歳ぐらいで満州に渡り、過酷な開拓に従事し、終戦になって二カ月も歩き続けてようやく撫順にたどり着いたそうです。みんな栄養失調で、やせて青い顔をしていました。こんな人にも、零下二十度の夜中に石炭を掘らせたのです。こうしてでも働かなければお金をもらえず、何も買えませんから餓死するしかないのです。撫順にいる日本人は、みんな同じでした。私たち看護婦も、一月月百円の給料をもらって休みの日に市場へ買い物に行きました。買えるのは高粱だけで、このころ一番食べたいと思ったのは、塩で握った白米のお握

りでした。

夜、寝るときの寒さも格別でした。支那布団と
いうのは黒い布で、綿が少ししか入っていないも
のでした。それを一人一枚しかくれないのですか
ら、一枚を下に敷き、二枚を掛け布団にして三人
一緒に寝ましたが、真ん中に寝る人が一番暖かい
ので、交替でそのようにして寝ました。

四月も近い暖かい日でした。診療所の道路を四、
五台の荷馬車が通りました。だれかが「あれは死
体ではない？」と言いました。荷馬車の壊れた囲
い板の隙間から見えたのは、死人の手足です。火
葬場がなかったので、防空壕に投げ込まれていた
のを、今から火葬することです。あの開拓少
年団の人たちも、何人が火葬されたと聞きました。
遺骨は遺族に届くのか、などと考えると戦争の惨
めさをひしひしと感じました。母のことも思い出
し、皆で早く日本に帰りたいと話合ったもので
した。

運ばれる死体を見て二カ月も経ったころの日曜

もありません。まあ大丈夫だろうと思っていまし
たが、不安は的中して、私と羅津からの友人と二
人に徴用がきました。私は何としても帰りたいと
思い、顔見知りのKさんに「結婚していることに
して、内地まで連れて行って下さい」と頼みまし
た。Kさんも納得してくれて、保険課にKさんが
「結婚しているのだから、連れて帰る」と話して
くれましたが、向こうは駄目の一点張りです。逃
げて帰ろうかとも思いましたが、一人でも脱走者
がいれば二千五百人全員の帰国も駄目というので、
あきらめました。

日本人の医師二人と看護婦二十人、一般人三、
四人と通訳の姑娘（クーニアン）が二人、院長の
所に挨拶に行きました。院長は、軍人で大佐だと
いうことでした。私の友人は顔色が悪く、やせて
もいましたので、大佐は「貴女は病気ですか」と
聞きました。友人が「はい」と返事すると、「すぐ
に帰りなさい」と言われました。大佐は、彼女が
結核だと思ったのです。国府軍は結核を怖がって

日に、皆で野原に遊びに行きました。一年前の八
月に撫順に来てから、野菜を食べたことは一度も
ありませんでしたので、アカザの葉を摘んで塩ゆ
でにして食べました。少し舌にざらざらしました
が、久しぶりに食べる青物は美味しいものでした。

このころから、内地に引揚げるうわさを聞くよ
うになりました。しばらくして、引揚げに必要な
腕章と胸章をもらいました。最初に帰国できるの
は、撫順まで酷寒の時期に二カ月も歩いてきた、
開拓団の人たちでした。次は私たち避難民でした。
二千五百人が一つの団体になって、一緒に帰るの
だそうです。予防接種が必要で、朝から晩まで注
射、注射でした。帰国までの食糧は自分で用意し
なければならぬと言われ、乾パンと水飴を買
いました。

四 国府軍への徴用

そんな折、羅津で一緒の看護婦が国府軍に徴
用されたと聞きました。私は既婚者には徴用はこ
ないと聞きましたが、今更すぐに結婚できるわけ

ではありません。

結局、羅津組では私一人になってしまいました。
国府軍と共産八路軍の内戦が続いているようで、
負傷した兵隊さんが毎日百人くらい運び込まれま
す。日本人の先生が、午前中は回診、午後は手術
をされました。先生も看護婦も国府軍将校並みの
待遇でした。ただ、食事がどうも口に合いません
でした。お粥はよいのですが、おかずがピーナツ
を油でいたため塩をふりかけたものと、ニンニクが
ごろりと出ているだけです。昼食と夕食は普通の
ご飯でしたが、おかずが油濃くて閉口しました。
日本のご飯とみそ汁、漬け物を食べたいと思いま
した。

二十日くらい経ったころ、私が熱を出しました。
最初は三十七度二、三分で、体がすごくだるいの
です。院長は休ませてくれません。だんだん熱が
高くなり、三十九度まで上がりました。腸チフス
ではないかと先生方も言われ検査もしましたが、
それは否定されました。四十度以上の熱が二週間

も続き、重湯ものどを通りませんが、我慢して水だけは飲みました。私と同じところに、同じような症状で発病した人が一人いました。看護婦ではありませんでした。高熱が続いているときに大声をあげて廊下を走り回るので。脳症を起こしたのです。「働かざるものは……」で付添もつかずで、結局亡くなられたそうです。私には羅津の保険課長さんや看護婦が見舞いに来て、一ミリのB1や強心剤や注射器、アルコール綿など届けてくれました。「必ず自分で毎日打ちなさい」と念を押して帰られました。あの強心剤が、私の命を救ってくれたのだと思います。あとから聞いたのですが、友人の看護婦は、保険課長が「小林（私の旧姓）はもう永くないだろうから、見舞いに行つてやれ」と言われたのだそうです。そのころ私は、「お母さんに看病してもらいたい」としみじみ思っていました。不思議にも、そのころ母も家において、私が三晩もどこかをさまよい歩いている夢を見たそうです。親と子は何か通じるものがあるのでしょうか。

うと、にやつと笑いながら中国語で「帰りたければ勝手に帰ればよい。去る者は追わない」と言うのです。私たちには分からないと思つたのでしようが、意味は分かりました。私はその場で「よし、逃げよう」と脱走を決心しました。

五 脱走

私は婦長さんに「ちよつと寄りたい所があるのですが、良いでしょうか」と許しを受け、すぐに羅津鉄道局の本部に行きました。そこには知つた顔の人もいましたので、その人に「今私たちのいる部隊が、今日四時に移動するので、私は脱走しようと思うのです。内地まで連れて帰つて下さい」と頼みましたら、「俺たちが脱走しろとは言えないが、本人が脱走すると言うなら、内地まで連れて帰つてやる」と言ってくれました。局の人には、「支度をして二、三日したら来ます」と言つて、その日は結婚している友人の所に泊めてもらい、翌日病院に帰りました。満鉄の社員服とモンペの上下、下着だけを風呂敷に包み、それを軍隊のジ

か。母は、夢を見たときから一週間、近くの神社にお参りして娘の無事を祈つてくれたそうです。二カ月も経つたころやつと平熱に戻り、食欲も出て勤務もできるようになりました。血液検査で腸チフス菌が出たと教えられました。死んでも不思議ではなかったのが助かったのですから、他国の兵隊でも生きられるように頑張つて看護しようと思ひました。

軍隊が移動することになり、病院も一緒だと言われました。そのとき看護婦二人が肺門リンパ腺炎になり、先生の診断書を軍隊の本部に持つて行つて帰国証明書をもらうことになりました。婦長さんが、「あなたも一緒に付いて行つて」と言われましたので付いて行きましたが、私も病気になつて帰りたいな、と思ひました。国府軍の本部長は、でつぷり太つた中將の階級でした。婦長さんが二人の診断書を出したら、帰国証明書をくれました。そのとき、婦長さんが「私たちも早く日本に帰らせて下さい。国で父や母が待つておりますから」と言

ヤンパーでさらに包みました。今までお世話になつた看護婦さんたちにはわけを話し、お礼を言ひました。脱走しても、捕まれば一カ月間営倉に入られるのですが「そのときはまたよろしくお願ひします」と言ひました。先生方にも脱走の決意を伝えましたら、「自分たちもいつまでも面倒を見られるか分からない。脱走の決意があるなら早い方がよい。実行しなさい」と励まして下さいました。食事時間で、兵隊たちが外で食事をしていましたが、その間を縫つて門から道路に出ました。しばらくは登り坂でしたが、決して慌てず散歩しているような格好で歩きました。道端に石があつたのでそこに腰を掛けて、追いかけてくる兵隊も来ないのを確かめて、あとは夢中で下り坂を走りました。前に泊めてもらった友人の所に行き、その晩は泊めてもらひました。

病気で帰国証明書をもらった二人の看護婦さんが帰国する日です。撫順の駅まで行きました。二人を探して挨拶すると、「貴女、よく逃げられたわ

ね」と言われました。子供さんのいる人が脱走しようとして見付かり、そのとき私もないことが分かって大騒ぎとなり、結局この方々の出発が二時間も遅れたのだそうです。羅津局の本部に行きますと、「局は、全員二十日後に出発帰国するから一緒に帰ろう」と言われました。私にすれば今すぐにも帰りたいのですが、一人ではどうにもなりません。

その間、近くの日本食堂で皿洗いをして過ごすことになりました。昼食はここで頂きました。カレーライスが主でした。三百食も出ますので、皿は洗っても洗っても次から次に回ってきます。割らないように気を付けながら、一生懸命に洗いました。そのうち、胸章と腕章がないと帰国できないことが分かりました。脱走してきたので、そんなものはありません。中国の帰国者本部に行き、中国街で働いていたので、と嘘をついて、変名で胸章と腕章を作ってもらいました。変名すれば今までに取得した看護婦、助産婦の免許証を持って

うと思っていきましたが、内地に帰って再交付して頂きました。

六 帰国

ようやく撫順を出発する日がきました。昭和二十一年十月十六日でした。駅を歩いていましたら、あの保険課長も同じグループにいるではありませんか。自分だけは帰っていくのです。中国の軍隊に置き去りにした看護婦は、これから先どうなるのだろうと思うと悔しさが込み上げてきました。

撫順を出発してから四日目に、葫蘆島コロトクに着きました。医師はだれもいません。具合の悪い人の看護は私しかいませんので、結構多忙でした。中国人の検査官が検査を始めました。検査は名目で、荷物の中のめぼしいものを取り上げるのが目的でした。悔しさを我慢するしかありません。一日がかりの検査が終わって、やっと船に乗り込むことができました。日本丸という船でした。大勢の人で、船の中はごった返しておりました。二度と来ることのない満州ともお別れです。心は故郷に飛

帰れません。しかし、そのときは免許証などどうでも良い、と思っていました。ただただ内地に帰ることが最も重大なことでした。

こうなると思いついても悔しいのは、撫順の保険課長です。撫順にいた看護婦はだれ一人徴用されず、冬の支度も充分に整っていました。軍隊に送り込まれたのは、よそから避難して撫順に入った人ばかりで、しかも着替え一つ持たずに四十分も歩いて診療所に通ったのです。同じ日本人ではありませんか、なぜこれほど差をつけたのか。保険課に行き、あの課長に会い「撫順看護婦との差別のこと、私が軍隊の移動につけ込んで脱走したこと、そのために変名で胸章と腕章を作ったこと、従って持って帰れない本名の免許証を、内地のこの住所に送ってほしい」と二枚の免許証を差し出しました。保険課長は顔も上げず、うつむいたままでした。保険課長一人で決めたことではないでしょうが、やっぱり悔しかったです。「お願いです」と言って保険課を出ました。どうせ駄目だろ

んでいました。病気の人、船酔いなどで気分の悪い人で、救護室はいっぱいでした。私も、博多に着くまで四日間お手伝いしました。

夜になって博多港に着き町の灯りを見てみると、なんだか涙が流れてきました。検閲の結果が出ないと上陸できません。四日間船にいて、ようやく上陸の許可が出ました。D D Tを掛けられて、ようやく上陸できましたが夜になっていたのです、ここで一泊して翌日帰郷先ごとの列車に乗車することになりました。誘われて闇市に買い物に出掛けました。葫蘆島でもらった一人千円が手持ちの全部です。闇市というだけあって、いろんなものを売っていました。海苔巻きが一本二十円でした。一人二本ずつ買い、宿舎に帰りました。切るものがないので、そのままかぶりつきました。ご飯は三、四ミリしかなく、中身はほうれん草でした。なんだかがっかりして、戦争に負けると人の心も皆変わるんだと話合いました。

列車は東北、関東、中部というように区分され

ていました。車掌が自宅に打つ電報を扱うというので、かなりの人が頼み、私もお願いしました。車中で一泊して翌日午前十時ころに長野に着きました、電報を打ったのだから、だれかが迎えに来てくれると思います。がだれもいません。もしかすると、母は亡くなっているのかもしれないと不安になりました。馴れた道を、手提げ一つ持つて我が家へ急ぎました。途中、向うから見覚えのある人が歩いて来ます。もしかしたら母かと思いい、急ぎました。やはり母でした。「お母さん」と声を掛けると、母は驚きました。「よく帰ってこられたな」と、涙を流して喜んでくれました。電報は届いていませんでした。一緒に家に帰りましたが、母が生きていてくれて良かったとしみじみ思いました。家に帰ってみると、私の写真を飾って陰膳を供えてくれていました。「お母さん」病気になるたとき何度呼んだ言葉でしょう、母は私たち子供のために、ただただ苦勞をいとわず働き続けてくれたのです。

「百万人の人に百万人の母あり。然れども我が母に勝る母なし」お母さんありがとうございました。